

県西総合病院での臨床研修

茨城県・県西総合病院長 中原智子

はじめに

県西総合病院の位置する筑西・下妻医療圏は関東平野の真ただ中にあるが、当院のある桜川市は東南を筑波山～加波山、北を栃木県境との山並に囲まれた盆地にある（図）。筑波山を北側から見ることになり、男体山・女体山の2峰をバランスよく、山すそまで眺めることができ、住民はこの地域から見える筑波山の形を誇りに思っている。また「西の吉野、東の桜川」と形容されるように、山桜の地として有名である。

桜の木1本ごとに異なる淡いピンクと雑木新芽の薄緑が混在して、パッチワーク状に市の周囲全体を覆うさまは独特である。市役所内にも農林課イノシシ対策担当に加え、今年はやまザクラ課が設置され、「真壁のひな祭り」に加えて観光の拠点として取り組む方針が示された。

道路網の発達により若い世代の流出が見られ、市町村合併時5万人あった人口は12年の間に4万3,000人に、また1年間の出生数も250人に減少した。幼稚園・保育園の統合に加え、今後小学校の統合も予定され、すでに一部では小中一貫校化も決定している。里山の奥まで住民は住んでいるが廃屋が増加し、市街地にまで太陽光発電設備が乱立し、高齢化率は2035年には40%に達する予定である。

県西総合病院概要

当院は昭和32年に岩瀬町国保病院として発足し、昭和42年、近隣5か町村による一部組合立の県西総合病院となり、さらに町村合併により桜川市（3町村）と筑西市（2町編入）との一部組合立病院となった。急性期病床299床・伝染病棟4床を有する病院であったが、

図 県西総合病院の位置



写真 県西総合病院外観

現在は療養病床を含む192床として、二次救急までを担当している（写真）。

新臨床研修制度開始後、当院および隣の筑西市民病院とともに医師数が半減し、診療科の縮小・撤退により救急患者は他の医療圏に流出することとなった。10年以上前から、当院と筑西市民病院との公立病院再編統合が話題に上っていたが、東日本大震災により筑西市民病院が大きな被害を受け、診療規模を縮小せざるを

得ない状態となった。さらに当院も耐震能低下の建物があり、公立病院再編統合が進むこととなった。

患者流出を最小限に抑え、地域の医療を地域で担う目的で二次救急までの完結を目指し、地域人口の中心である筑西市内（旧下館市）に平成30年10月開院予定で新病院を建設中である。60年前の診療所・国保病院時代から桜川市岩瀬にあった県西総合病院は、病院の歴史を知らぬ地に移動することになる。

臨床研修への取り組み

このような地域にある県西総合病院であるが、筑波大学では新臨床研修制度に先駆けて平成14年から研修を開始している。当院は協力型病院として内科1名・小児科1名の時期、次に小児科初期研修（+地域研修も含む）のみ1名の時期、平成28年度からは初期研修小児科1名、総合診療科後期研修の小児科1名を受けている。

当院での研修内容

当院小児科での研修は初期研修2か月（当院において地域研修を受ける場合は3か月）、総合診療科後期3か月を基本としている。地方の病院小児科は、小児一般診療として急性気管支炎・肺炎・気管支喘息・胃腸炎、水痘・インフルエンザや夏風邪等の感染症が多く、また川崎病等の小児特有の疾患に直接携わることができる。これらの外来診療ならびに入院を要する基準を判断し、入院治療ができるようになることが、後期研修医の研修目標として必要最低条件である。初期研修医においては、当直で小児が来ても適切な対応ができ、入院が必要か否かの判断ができるようになることを目標としている。

保健師や学校養護教諭との連携による肥満・低身長精査、発達障害の診察治療も多く行っており、研修医にとって将来外来診療の場で活かされるであろうと考えている。学校の長期休暇には成長ホルモン分泌刺激試験や糖負荷試験を含めた肥満の精査が多く、ベテラン看護師の指導の下、検査に励む日が多い。10月から11月にかけてはインフルエンザワクチンが加わった

め、予防注射が大きなウェイトを占める。学校保健として、幼稚園・小学校・中学校・高校までの内科健診に同行することも多く、4～6月にかけては極めて過酷な日々を過ごすことになる。

研修内容に関しては季節的な差が大きく、2～3月の研修では地域医療の多様な業務を平均的に経験することは難しい点が問題である。予防接種・乳児健診（院内および市）、肢体不自由特別支援学校の医療的ケアに帯同してもらうこともあり、大学にはあまり見ることのない障害児の学校生活とケアを必要とする患児への教育を体験していただいている。

医療的ケアを行っている学校の生徒の親がレスパイトケアの施設がなく困っていたので、平成26年度からレスパイトケアも開始し、研修医にも携わってもらっている。さらに平成27年から病児保育も行っているため、研修医が担当することもある。

筆者自身が立ち上げ、30年以上携わってきた小児科であり、地域で唯一の小児科入院のできる施設である。スタッフの協力のもと、自分たちが少し頑張ればできることは何でもやろうという気持ちで診療してきたので、経験できる範囲は極めて広いといえる。しかし、少子化と県内での小児科救急診療体制の整備により、地方での経験症例数は減少してきている。

一方、内科・外科に関しては、初期研修は内科・外科同一施設が望ましいという大学の方針で、10年以上研修医派遣はない。今後の病院再編後は内科の診療科の充実を図り、受け入れを強化していく方針である

研修成果

初期研修医が希望の診療科に進んだ後、当院に外来診療あるいは非常勤当直医として来ることが多くなった。転送先のさまざまな診療科に当院で研修を経験した医師がいることにより、連携がとりやすくなったことも見逃せない。

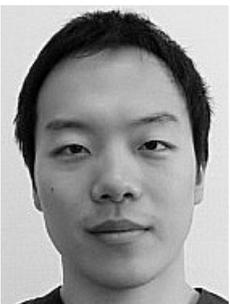
後期研修医に関しては、合併症あるいは併発症のないフレッシュな症例を見ることができ、専門医試験受験にあたってはよい症例が多いと自負している。さらに入院前に自身が外来で診た症例であれば、入院の妥当性を判断でき、短期間であっても退院後の経過を見たり、専

門的な治療まで関与することができる場合も多い。中小病院であるゆえのメリットであると考えている。

総合診療科の研修医が、育児休暇明けに当院で後期研修（小児科3か月、総合診療科9か月）を行った。1年以上のブランクに不安を抱えていたようだったが、研修終了時には自信をもって診療にあたる姿を見ることができた。病児保育を利用し、不安なく子どもの診療に奔走する姿は、医師不足地域の医療と女性医師の育児後のリハビリ、あるいは専門医資格取得のための施設としての可能性を考えるうえで意義深いと考えられる。

新臨床研修制度開始前から当科にローテートしてきた女性医師は数多くいるが、多くが現在県内の主要病院小児科の医長や部長、あるいは開業して学会内で活躍し職責を果たしている。指導医自身が子育て中であり、研修医に十分に手をかけられず申し訳ないと思ってきたが、各研修医が立派に成長した姿を見ることは、指導医にとっても至上の喜びである。さらに地域医療に進んでくれたことは、県西総合病院としても誇りに思えるところである。

研修修了者からのコメント



県西総合病院小児科での研修

筑波大学附属病院初期研修医
曹 宇晨

私は筑波大学附属病院の関連病院研修として2017年2～3月の2か月間、県西総合病院小児科で研修させていただきました。当院小児科では専門医2名体制で、外来診療を軸としながら入院加療も積極的に行っている。平日は週3回の夜間外来（19時まで受付）を行い、週末でも土日ともに9時半まで受診を受け付けている。

そのような病院は初期研修医にとって手技を経験できる貴重な場であることに私は幸運ながら早くに気が

付いた。小児科には病棟にも外来にもこれでもかというほどに経験豊富なベテラン看護師さんが多数在籍している。私は当院に赴任するまでは小児の採血も点滴も恥ずかしながら一度も経験したことがなかったが、皆さんのこの上なく丁寧でユーモア溢れるご指導のおかげで、毎日精力的に手技に取り組むことができた。

小児科外来では、毎日発熱や上気道症状、呼吸器症状などのcommonな症状を訴える子どもたちが多く受診してくる。まずは見学から開始し、軽症の風邪症候群の患者から少しずつ診療する機会も与えていただいた。実際に小児の患者さんを診療する際は、風邪症候群とわかっていても、なんとも言えない緊張感と闘いながら診察することになる（親御さんがいる関係もある）。そんなぎこちない私の様子を上級医は後ろからさりげなくも温かく見守ってくれた。そのおかげで悪戦苦闘しながらも、日々少しずつ小児の診療に携わっているように感じていった。

また、予防接種に関しては、上級医や薬剤師・看護師・事務等のコ・メディカルのスタッフの強力なサポート体制の中、研修医が中心となって行った。講議のみではなかなかイメージが難しい予防接種であるが、実際に問診・診察することで、実践的な知識を身につけることができた。

当院はこのように恵まれた研修環境がありつつ、自分の裁量で使える時間もあるため、講議と実践での勉強をバランスよく経験することができた。今後私はここ地元茨城県を離れることになるが、救急外来で困ったときには上級医から伝授していただいた経験が、静脈路確保などで困ったときにはベテラン看護師さんたちの茨城弁での叱咤・激励が強い味方になってくれるに違いない。



県西総合病院小児科地域研修

筑波大学附属病院初期研修医
荒木孝太

私の初期研修病院のプログラムでは、小児科あるいは

は小児外科での研修が義務づけられている。その研修先を決める際に、総合診療科の後期研修中の先輩の薦めで選んだのが県西総合病院であり、小児病棟での業務や外来など患児を対象とした医療以外に、多くのことを学ぶことができた。

■学校健診

4月からの研修ということもあり、指導医が学校医を務める近隣の幼稚園、保育園、小学校から高校までの健康診断という非常に貴重な経験を積むことができた。今までの病院での学生実習、初期研修では病気を持つ患者を相手にし、その精査・治療をすることが大半だった。しかしながら、健康診断では多くが健康な子であり、その中に時折脊椎の変形や心雑音などの異常を拾い上げていくスクリーニングは経験したことがなかった。幼稚園・保育園ではアトピーの子が散見され、なかには未治療の喘息の子もいたことに驚き、大病院では感じにくい疾患の有病率というものを自分なりに持つことができた。また、指導医の専門が小児の神経や成長（内分泌）であるため、児童における低身長や肥満にも注意を払う姿勢も学ぶことができた。

■予防接種

これもまた、主に健康な子を対象とした医療である。現状の政策では、生後2か月頃から最大5種類の同時接種が始まることは座学ではわかっていたものの、実際に接種する側になってみると大変だった。診察室では、ときに暴れたり騒いだりと壮絶な光景が広がっているが、接種前後で大きく態度が変わるなど微笑ましい一面も見られた。

■乳児検診

乳児の成長・発達が問題ないかを確かめるのに加えて、子育ての相談（食事など）など養育者の不安や疑問にも答えていた。予防接種と合わせて何度も顔を合わせる子どもたちがおり、その中での変化を見ることができた。

■まとめ

3か月という短い期間ではあるものの、子どもの成長・発達をこれらの研修を通して継続的に確かめられた。疾患のあるなしに関わらず、子どもたちの健やかな成長を守り、見守ることが県西総合病院小児科の地域における機能・役割だと肌で感じる事ができた。

このような貴重な研修をさせていただいた、院長を始め、県西総合病院の職員の方々に感謝している。



県西総合病院小児科を研修して

筑波大学附属病院総合診療グループ後期研修医

永藤瑞穂

筑波大学総合診療科後期研修の小児科研修の一環として3か月、総合診療科として9か月、計1年間県西総合病院で研修させていただいた。産休明けでの勤務となり、勤務体制に支障をきたさないか不安もあったが、自身も子育てをしながら仕事を継続されてきた院長先生のご理解・お気遣いをいただき、指導医、ベテランの看護師さんたちから強力にサポートをいただき、大変有難い研修環境であったことを改めて御礼申し上げます。

小児科立ち上げから着手された現院長はまさに地域に根ざした小児科診療を行っており、親子三世代以上にわたってご存知の患者さんも多く来院されていた。「そのお家はね…」と患者さんに関係があるご家族を熟知されており、地域を診るとはこのことかと感動した。小児は症状・経過を知る上でも親と関係することが多く、プライマリケアの領域で必須項目とされる家族志向のケアを行う視点が自然と身につくように感じた。

子どもを知ることは家族を知ることにつながり、それは地域を知ることにつながる。プライマリケアにも通じる小児科の展望・視野の広さを教えていただいた。私が赴任した時期はちょうど夏休みにあたり、一般的な小児疾患はもとより院長が専門に行っている低身長・肥満児精査も行うことができ、自身の専門領域（プライマリケア）で注意すべき領域を広げることが出来た。近隣の学校健診、特別支援学校の医療的ケアにも同行させていただき、貴重な経験となった。

県西総合病院は1年半後に筑西市民病院と合併し、新たな中核病院となる。当地域は小児入院設備を備えた病院は当院を除いては車で1時間前後の場所しかなく、小児科専門開業医も少ない。今後も地域を支える

小児科として発展してくれることを願っている。



私は筑波大学附属病院総合診療グループで総合診療医・家庭医を目指して後期研修をしている。2017年1～3月の3か月間、県西総合病院小児科で研修を行った。

外来診療は上気道炎や胃腸炎といったcommonな疾患の診療を主に行った。将来小児科専門医として働くわけではない自分にとって、将来主に診るであろうcommonな疾患を中心に診療ができたことはとても良いトレーニングになった。また、commonな疾患に紛れ込んだ緊急性の高い疾患や重症度の高い疾患の患者は、診療所のセッティングにおいては他院へ紹介となることがほとんどであるが、県西総合病院は地域の中核病院としての役割もあることから、近隣の診療所からの紹介患者を受ける立場にある。そのような患者さんを受け取る側として診療できたこと、入院後の治癒の過程を経験できたことは、家庭医としての今後の診療にも大いに役立つと思われる。

乳幼児健診についても、小児科の先生にご指導いただきながら健診を行った。母親からの何気ない相談に乗ることなどはまさに家庭医に必要なスキルであり、小児科の先生方からたくさんのヒントやコツを得た。ワクチン外来にも携わることができ、ワクチンプラクティスの経験が増えた。

家庭医を目指す自分にとり、小児科研修はスキルアップ上からもプログラム上からも必須である。研修前より小児科研修で経験すべき目標としてcommonな小児疾患の診療、ワクチン、乳幼児健診の3つができるようになることを挙げていたが、そのすべてにおいて充実した研修ができた。

県西総合病院小児科で学んだ経験を生かして、地域を支えられる総合診療医を目指して今後も研修に励んでいきたいと考えている。



私は2016年4月から6月まで県西総合病院の小児科で研修させていただいた。小児科専門医2名、初期研修医1名と私の4名体制の中で外来、入院ともに任せられることが多く、毎日充実した日々を過ごすことができた。県西総合病院は長年にわたり地域の中核病院として住民や近隣の診療所から頼りにされてきた病院である。独歩で来院される方以外に紹介患者も多いため、外来診療では量だけでなく、幅広い疾患の診療に携わることができた。平日外来は上級医との並列での診療のため、疑問や対応に困った症例があればすぐに相談することができ、安心して経験を積める環境が整っていた。中には典型的な主要症状を呈した川崎病の患児や腹痛を主訴に来院した精巣捻転の患児を診る機会があり、教科書や研修医マニュアルに記載されている通りであったことに気分の高揚を感じた。

一方入院では、感染症（主に肺炎、胃腸炎）や気管支喘息の患児が多く、それぞれの疾患の自然過程を毎日観察できたことは非常に良い勉強になった。また入院診療の上では、両親も含めたマネジメントが重要であることを再認識する機会も多かった。両親の希望により大学病院に転院搬送したマイコプラズマ脳症の患児の症例では、妊娠している母親の身体的負担や母親を支える父親の心理的負担を軽減させるために転院が望ましいという判断で転院となり、成人診療との違いという点で印象深い症例であった。

外来、入院診療以外にも予防接種や乳幼児健診、幼稚園、小学校、中学校での内科健診、特別支援学校への定期回診など、小児の健康管理に関するさまざまな診療も経験でき、小児科研修としては盛りだくさんの内容であった。現在勤務している病院の救急外来で小児を診察する際に、研修前よりも落ち着いて診療できているところに3か月の研修の成果を感じている。